原子力界シニアによる大学生等との対話を通したエネルギー教育の普及
（３）対話活動の意義―アンケートから振り返る

2009. 8. 9.
エネルギー環境教育学会2
第4回全国大会

＠福井大学

○松永一郎（ＳＮＷ）、金氏顕（ＳＮＷ）、石井正則（ＳＮＷ）、伊藤睦（ＳＮＷ）、吉田淳（愛知教育大学）

（注）SNW：日本原子力学会シニアネットワーク連絡会

アンケート調査の狙いと実績

- 対話会の成果を評価し、会の改善に資する。
  - 参加学生へアンケートの実施
  - 参加シニアへ感想文の提出を義務化
- アンケートの実績
  - 全24回、回収人数　約650名
    平均回収率約80％
  - 06年度5回（回収率～76％）
  - 07年度9回（回収率～80％）
  - 08年度10回（回収率～80％）

アンケート結果の分析（１）
（対話の満足度、必要性などについて）

1. 満足度について

2. 必要性について

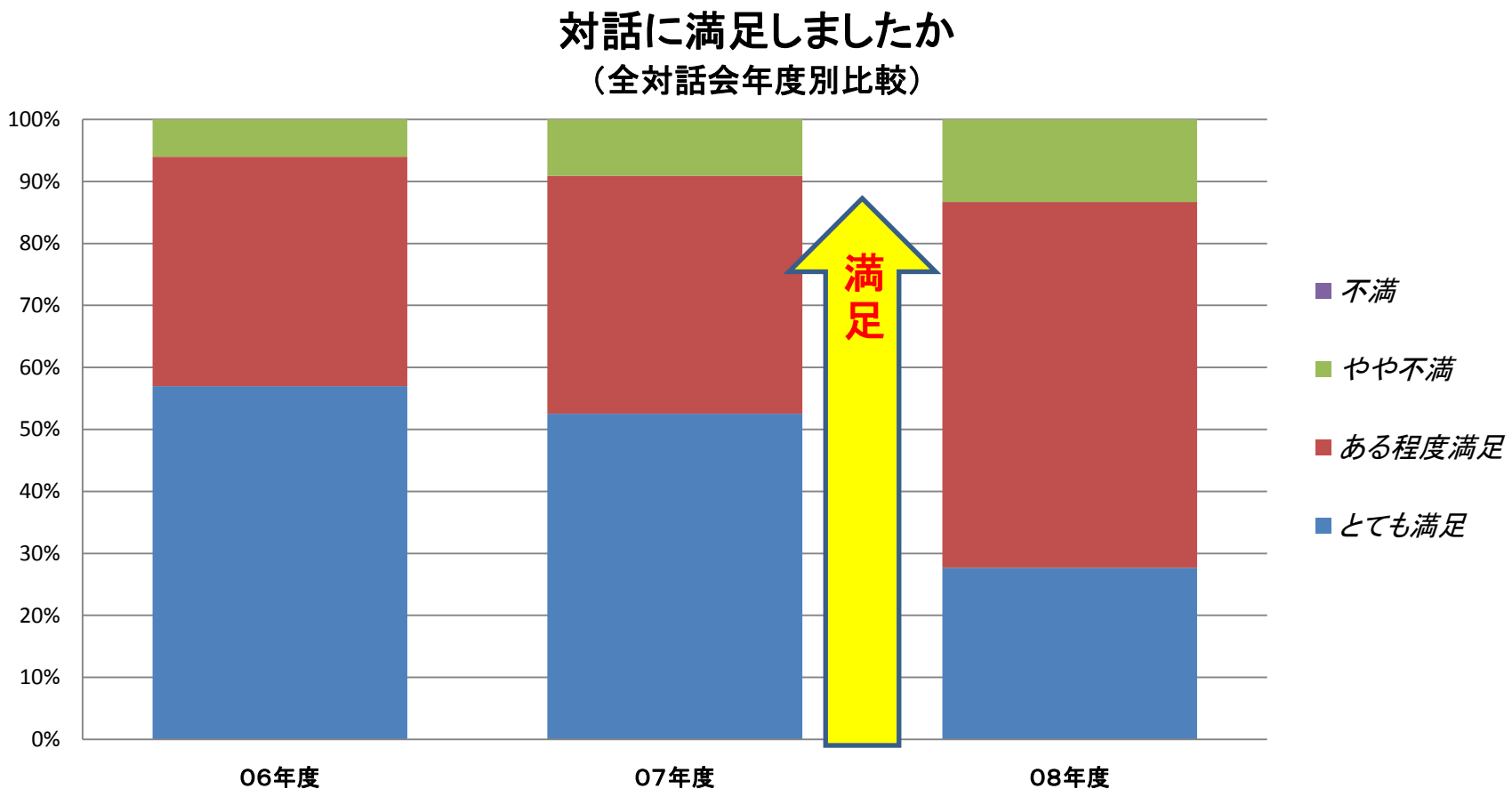
① 原子力系学生の年度別比較

② 理工系学生と原子力系学生の比較

③ 原発立地地域の学生

④ 教育系大学学生と現役教員の比較

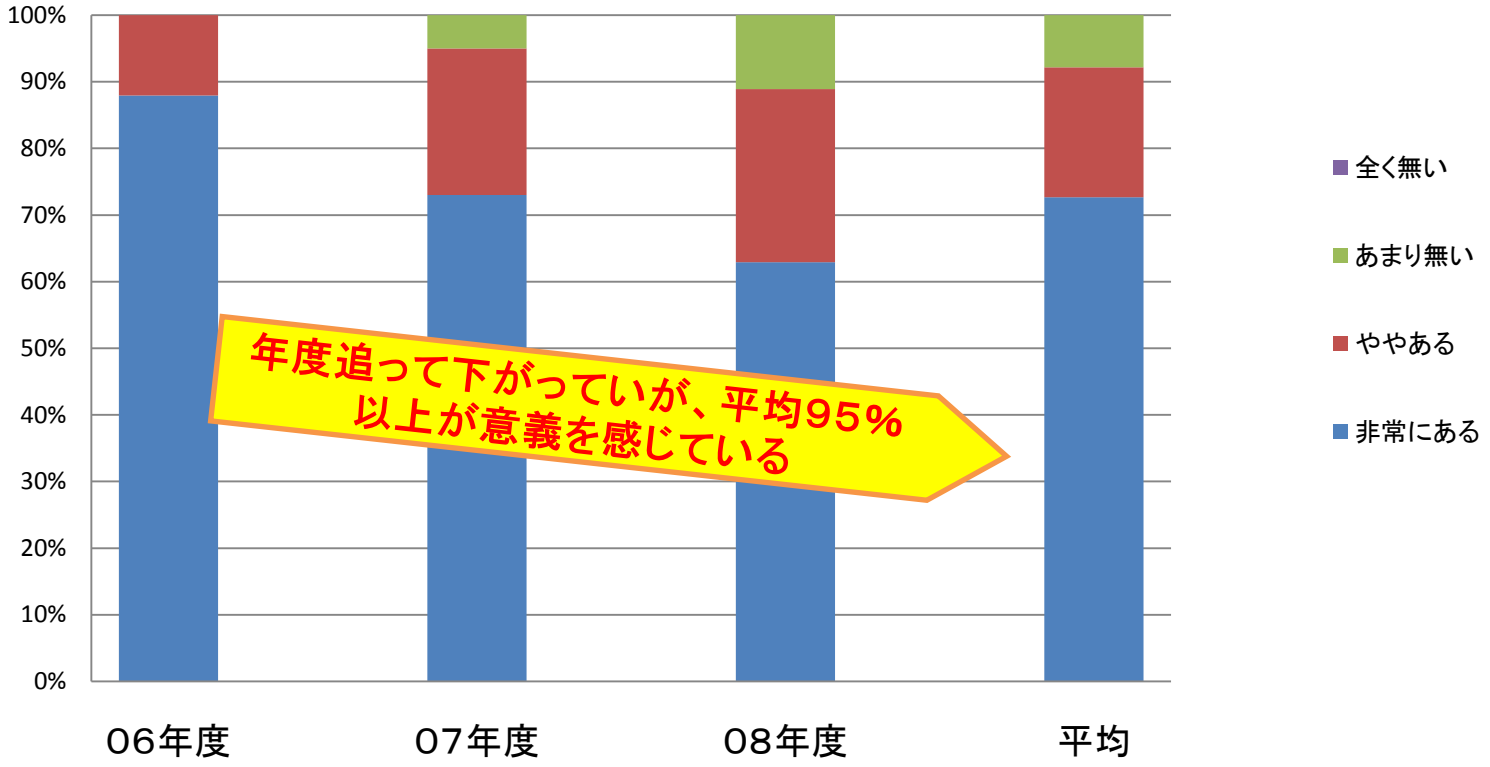
1．対話会に対する評価
（満足度について）



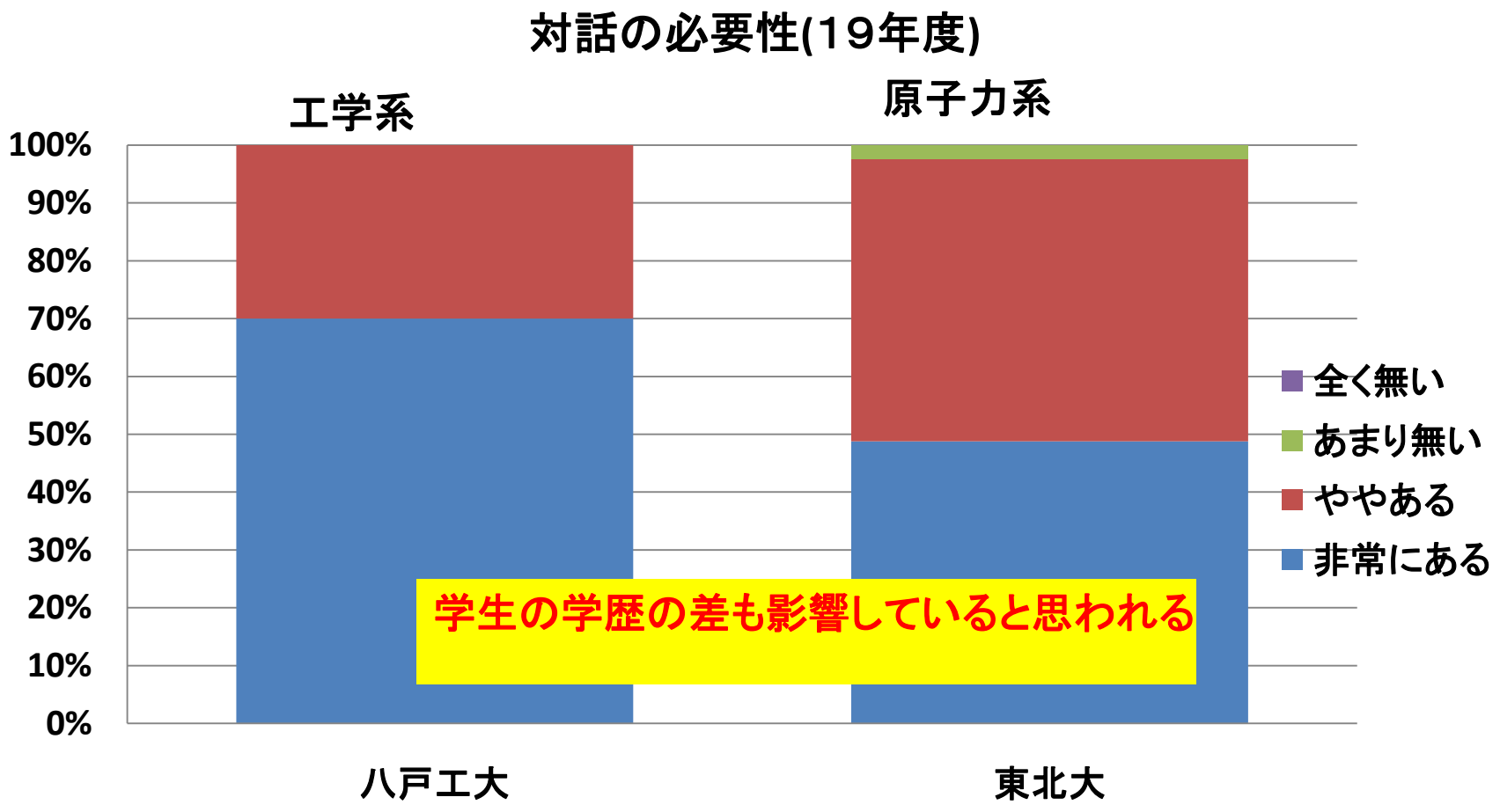
２－①原子力系学生の年度比較

北海道大学の場合

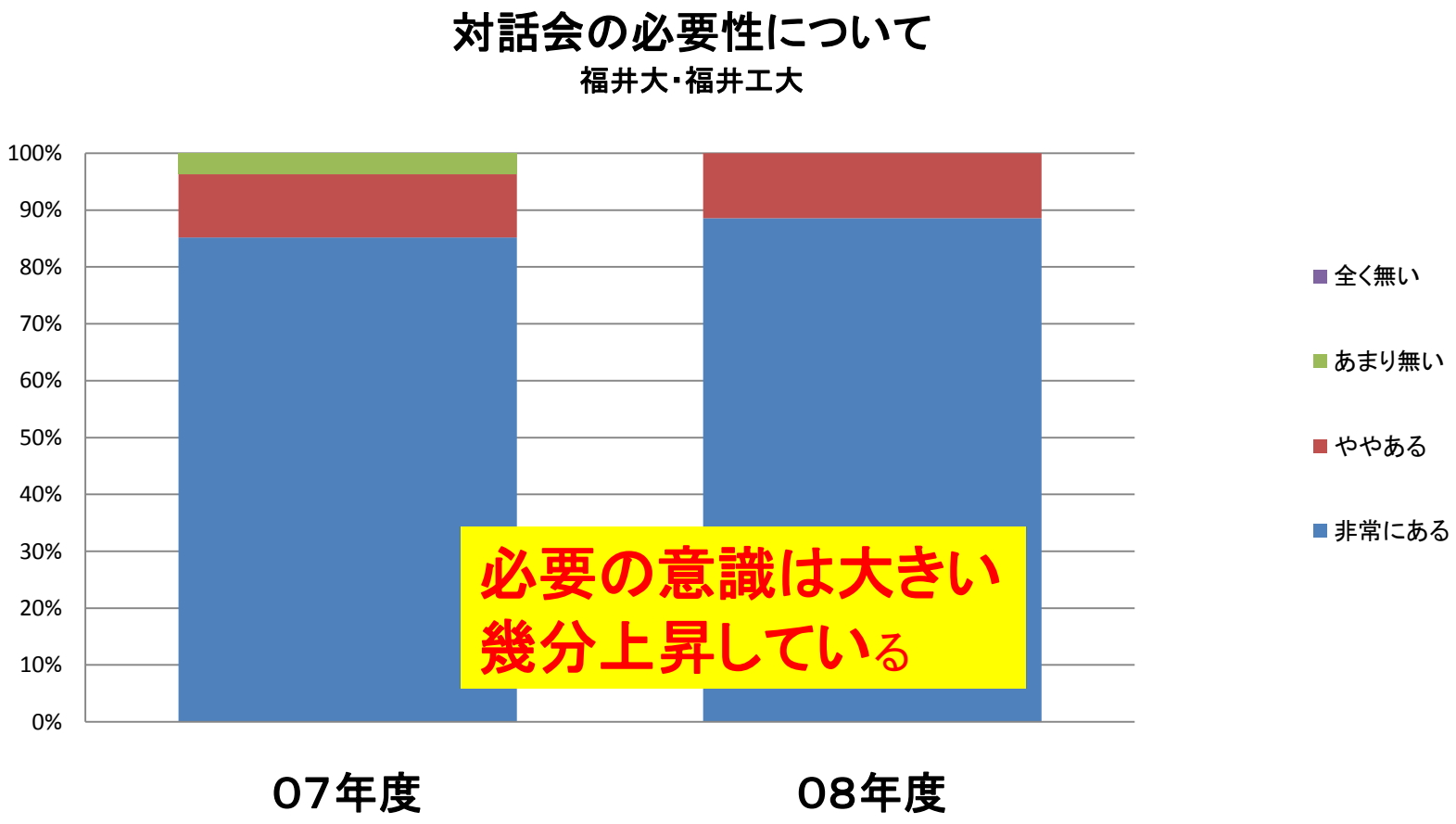
対話の必要性について
（北海道大学のケース）



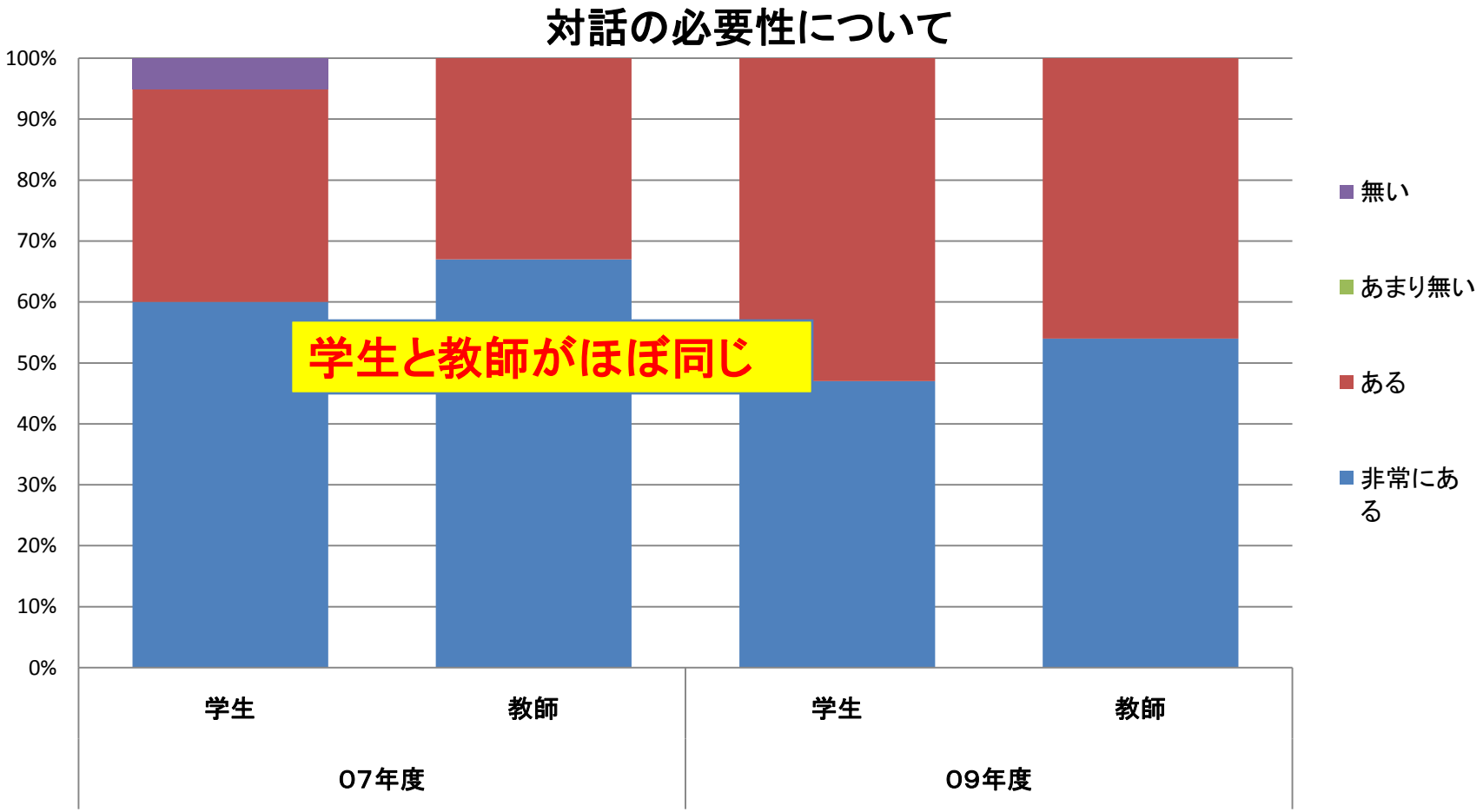
２－②工学系学生と原子力系学生の比較（八戸工大と東北大）



２－③原発立地地域学生の年度比較
（福井大･福井工大のケース）



２－④教育系大学の学生と現役教員の比較
（愛教大のケース）



アンケート結果の分析（2）

対話後の危機意識や原子力のイメージ変化から対話の影響について

① 原子力系学生の年度比較

I.　北大のケース

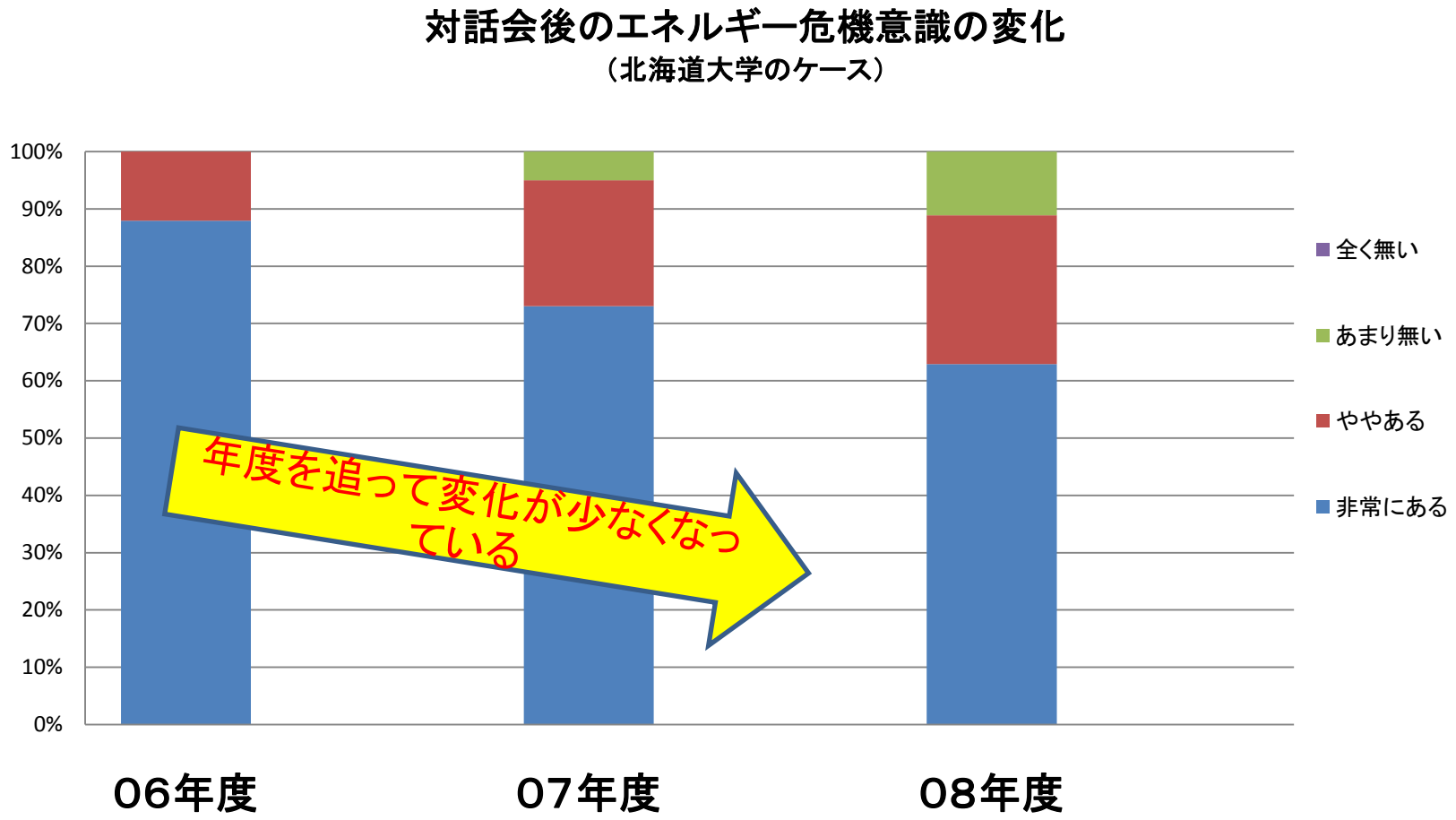
II.　原子力系大学の比較（エネルギー危機意識の変化）

② 専攻別の比較

原子力系、工学系、教育系の比較

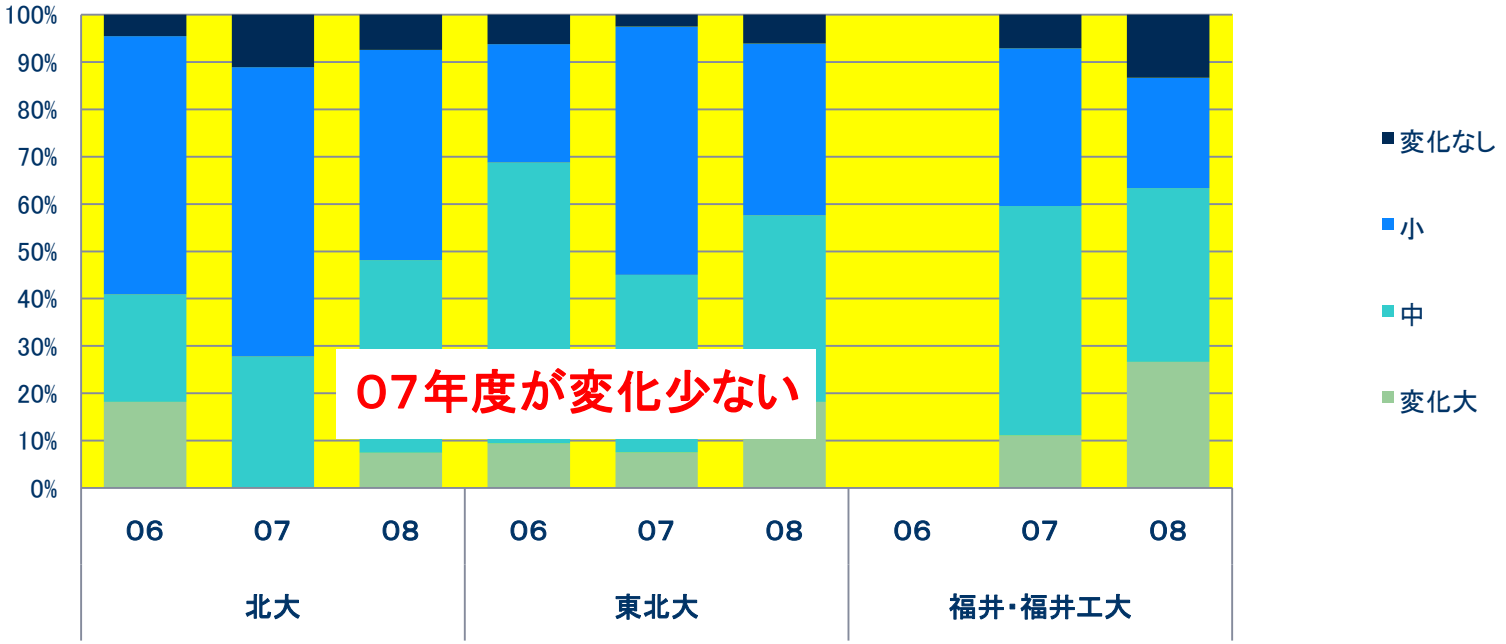
①原子力系学生の年度比較

北海道大学原子力系学生のケース



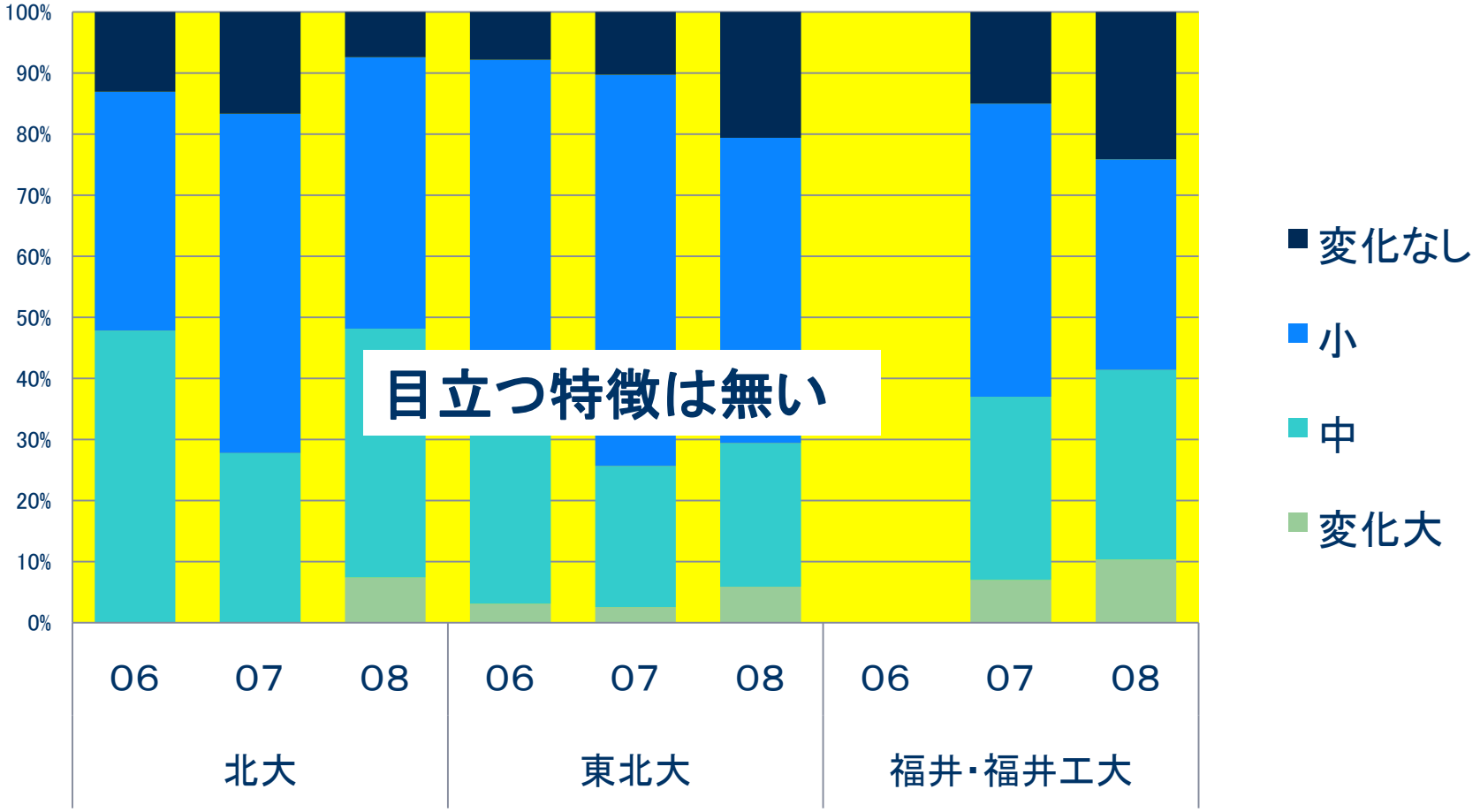
② 対話の原子力系学生へ影響
（エネルギー危機意識に対して、年度による違い）

対話後でエネルギー危機意識は変わったか



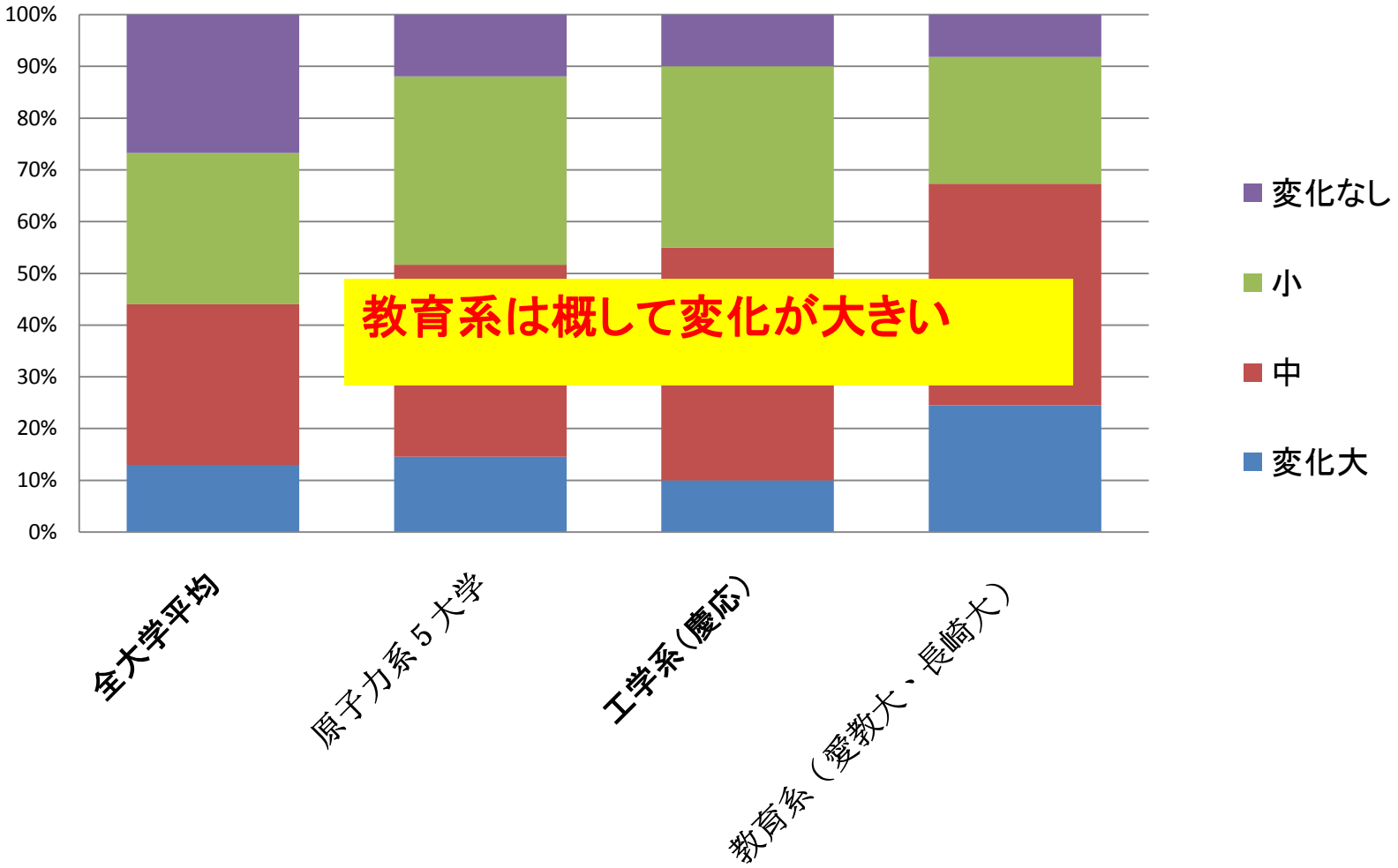
③対話の原子力系学生への影響
（原子力のイメージに対して、年度毎の違い）

対話後原子力のイメージは変わったか



④対話の影響の専攻別比較
（08年度について）

対話後エネルギー危機意識は変化したか



教育系大学参加学生の代表的感想

・原・原子力について全く知識がなかった私にとって、とても有意義なもので、今の日本のエネルギー危機の問題に始まり、放射線の正しい理解は将来を考える上でとても大切なことだと思いました。
・今・今回学んだことを踏まえて、原子力発電所に対して今まで否定的に考えていた自分の考えを見つめなおし、肯定的に理解していきたいと思います。また、原子力の社会受容性向上に向けて、小学校や中学校で正しく教えられるようにしていきたいと思います。
・今・今まで核兵器や原子力についてはあいまいな知識のままですごしてきてしまいましたが、子どもたちに正しく教えるためにももっと勉強していかなければならないと感じました。またあれほどの年齢層の中での発表も貴重な経験になりました。
・理・理科と社会専攻の生徒を対象にすることで「日本人の原子力嫌い」の解決の方法を探ることができました。

教育系大学参加教師の代表的感想

- 今までの原子力に対するイメージを変える内容ばかりで、このことをより多くの人、子どもたちに伝えたいと強く感じました。授業時間がなかなかとれない中で、将来子どもたちに分かりやすく、正しく原子力について教えたいと思います。

- 原子力について授業を考えた場合、一方的に原子力は安心だからというのではなく、反対している人の意見も尊重していくことが大切だと思いました。原子力の必要性を学んだ上で生徒にはより多面的に物事を考えることが大切であると思うので、なぜ原子力に反対か、問題点は何かを考えることも必要であると思います。

- 安全は論理から、安心は感情からくると思いますが、シニア方の情熱的な態度で、学生たちは分析を十分することなく感情から安心側に動いたと思います。批判的精神の欠如という見方もできますが、安全を論理で理解してもらうチャンス(耳目を開いている)とも思います。その 意味で浜岡原子力発電所の見学は効果的な企画だと思います。

- 教育学部の学生が、今回のような方々の話を聞く機会、逆に、これから教員になる学生の現状を皆さんに知ってもらう機会はとても有り難く、必要です。是非続けて頂きたいと思います。

結論

- 参加者の大半は有要性を認めている。
- その意義は年度、大学、地域などでそれぞれ微妙に違っているが、豊かな経験と実績を持つシニアとの対話は彼らにとっては、またとない機会であり，色々な観点から有意義であったと捉えている。
- 今後この様な対話会が各方面の人材育成と教育の場で活用されることを期待する。